

むじい夏

処刑とクチナシの花

作家 辺見 庸

寄稿

オウム7人死刑執行

ゆきつけのカフェの横にクチナシの生け垣がある。ビル影になつてゐるものだから、花の白さが小さな白熱灯のように浮き立ち、ぼつぼつと闇にじんんで暈をつくり、甘いにおいがいつそう妖しくなる。見たからといって気が晴れるところでもない、胸に花の影でもできた心地になつて、かえって落ちつかなくなるのはなぜなのだろうか。いぶかった朝に、いきなり、7人の絞首刑があつた。

そのまえ、花はまだ十数輪あつたのだ。まっ白いのも、黄ばんで落花すんせんのもあつた。窓際にすわり、はすかに花の落ちるのを目の端にいれると、ひやりとする。前置きがないので目に備えない。とっせんの白い垂直軌道。ぼつりと重く落ちて、花弁においが地に乱れちるのが、なんだか残忍にもおもえる。動悸がしてくる。わからないことが、かつてよりますます多くなつた。むなざわがする。

1995年3月20日朝。たまたま地下鉄日比谷線の神谷町駅にいた。ラッシュアワーの乗降客が整然とあるいていた。腐った花のような酸っぱいにおいがした。ああむけに倒れている数人を目にした。あるいてるうち、糸の切れたマリオネットのように、ゆっくりと崩れおちるひともいた。通勤者たちは倒れているひとを隣りで職場に急いでいた。声はなかった。叫びも。わたしは静かきにおののいた。無声のスローモーション映像を見ているようだった。

なにが起きているのだろう。怪しみはしたけれど、なぜかとは思わなかつた。現象の変化を目で追いはしても、その現象をもたしている深部がなにか……とまでかんがえはしなかつた。細部にだけ目がいく。全景の軸ではなく、周縁のひとひとの瞬間の表情や身ぶりのみを気にする。異変を知り、切符を買わずに駅構内に飛びこんだわたしをばげしく叱責した駅員の怒気。口から涎をながして倒れるひとを跨ぐ通勤者の、鉛のような無表情。水槽で平然と泳ぐ熱帯魚の赤黒い尾ひれ。

よくかんがえれば、あきらかに異常事態なのである。しかし、みながそうと判じるまでには、短いようで案外長い。空白の時間。と、けだるい口常動作の連続があつた。空白の時間にあつては、意味と価値がはたらかなくなる。するとひとの群れはぼんやりのかぶだんの集団的イナシーシャ(慣性)にしたがうのだ。職場にむかうも

のは、軍隊アリのごとく、いつもどおりの歩調で進むとする。倒れぬものが視界にあつても、群れは乱れない。近よつてたすけようとはしない。むろん例外はいくつもあつたのだが、あの日の朝は当初、あまりにも静謐で、ぞつとすくばり整然としていた。

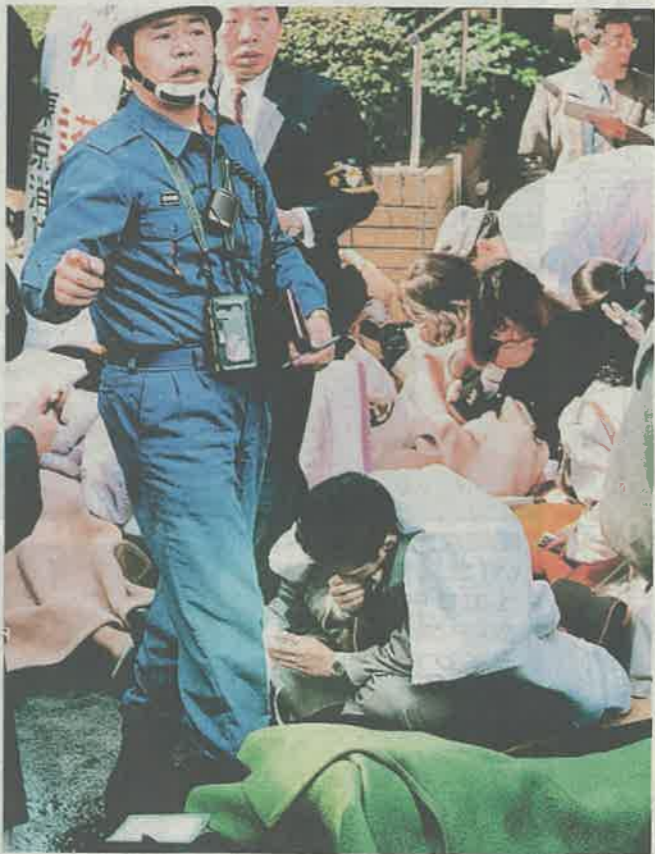
絞首刑の日にもクチナシの花が落ちた。カフェの窓にしてみても、ドスンと鈍い音がしたように錯覚した。そのとき、花はより濃くさいこのにおいを放つ。ひとも犬も、殺されるまえはつよくにおうという。たぶん吐しゃ物だつたのである。あの朝においが鼻孔の奥のこつていて、と、おぼろいおもいをかき乱す。なぜ殺すのか。災害でたくさんなくなつてゐるのにな、どうしてさらに殺すのか。ひととひとを、組織または国家の名のもとに、なぜ平気で殺すことが

できるのか。なぜ殺すにはいられないのか。国家による殺りくらは正当化されることもいろいろか。それなら戦争発動の論理と変わるころがないではないか……。地下鉄サリン事件から23年、こんな基本的な問いにさえ、満足に答えることができない。なぜなのか。

始原の疑問に回答しなければならぬ。子どもや孫たちにたすねられても、ごまかしではなく、しっかり胸をはって説明できるやうに。まず、この国は尋常なのだろうか。人間の「生体」を、法の名のもとに、強いて「死体」化させるのが、なにゆえゆるされるのだろうか。7人の生体を一気に死体化した日の夜に、家族でディナーを楽しみ、美しい詩を語り、お笑い番組でゲラゲラ笑つたこと、ひととして気が差さないものか。死刑制度を廃止した国ないし死刑の



へんみ・よう 1944年、宮城県生まれ。共同通信北京特派員などを務めた後、91年「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人ひと」で講談社ノンフィクション賞。現在、相模原障害者施設殺傷事件に想を得た小説「月」を月刊誌「本の旅人」に連載中。



地下鉄サリン事件が発生し、地上に避難した出勤途中の乗客たち。口をふさいで救助を待っていた1995年3月20日午前9時10分、東京・地下鉄日比谷線神谷町駅前

地下鉄サリン事件から23年 なぜ殺すことができるのか

執行を凍結した諸国が100カ国をこえるのに、なぜ日本は死刑を手放さないのか。

白状すれば、わたしは右の「なぜ」に、じゅうせんに答えていけないうちでいる。悩ますままに、しかし暗い疑念はふくらむ。この国ではいまや、死刑執行があたかも祝祭のようになってきてはいないか。古代ローマの詩人ユウェナリスが風刺したように。「……民衆はいま、一心不乱に、もつぱら二つものだけを熱心に求めるようになってゐる——すなわちパンとサーカス……」。パンは食料、サーカスはスペクタクル(見世物)を意味し、ローマ市民が愚民政策のとりこになつてゐるのを揶揄したのだ。

日本風に翻案すれば、さしずめ「グルメとエンターテインメント」とでもなるだろうか。死刑の光景は日本において不可視であるがゆえに、かえつて幻想のスペクタクルとなり、無意識のうき晴らし(娯楽)と化してはいないだろうか。だとすれば、この国はすでに人間の「つつしみ」というものがなにかを忘れ、倫理の根源に墮るゾーンに足をふみいれつつある。すなわち、日本はみよように晴れやかに危うい一線をこえたのだ。

わたしたちの内面はいま、ますます収縮の度をくわえてはいないだろうか。まるで古代社会のように7人を一日で絞首刑に処しておきながら、死刑囚の悪行のみをかたり、死刑の残酷性とその是非を論じようしないメディア。サッカーの試合後、日本人サポーターたちがみんなで会場のゴミ拾いをしたという公德心の高さと、絞首刑の国民的受容にはどのような道徳的なバランスがたもたれているのか。不可思議である。

麻原彰晃の初公判を最前列で傍聴したとき、かれの肌つやのよさときれいに整えられた爪に見入つた。「これは死にかけている男ではない。われわれとまったく同じように生きてゐるのだ。彼の体の器官はみんな動いている——腸は食物を消化し、皮膚は再生をつづけ、爪は伸び、組織も形成をつづけている——それがすべて完全に無駄になるのだ」。ジョーシ・オーウェルがはつきりと死刑反対を唱えたエッセー「絞首刑」(1931年)の一説を思い出した。

クチナシの花になぜ思いが乱れるのか、わかつた。ピリー・ホリデイがこの花を愛で、髪をまっ白いそれでかぎり、有名な「奇妙な果実」をつたつたからだ。黒人を吊し首にした木の歌。「南部の木は、奇妙な実を付ける／葉は血を流れ、根には血が滴る……」きのう、カフェにいった。白い花はこぼれ落ちていた。むじい夏だ。

「雇用の売り手市場」を巡る現状
大卒者の就職率の推移

就職率や求人倍率 高水準

雇用の売り手市場

もの知り